

問い9 環境・格差・貧困などの社会問題は、宗教が入り込む問題ではないと思いますが。

連研中央講師・岐阜教区
朝戸 臣統

2年ほど前、私たち本願寺教団では「子どもの貧困」という社会問題への具体的な取り組みとして「子どもたちの笑顔のために募金」を設立しました。

もちろん、それ以前からも、さまざまな寺院で「子ども会」「キッズサンガ」「子ども食堂」などの取り組みがなされています。私がお預かりしているお寺でも、数年前まで毎月「子ども会」を開いていましたが「子どもの貧困」という問題に深く向き合ってきたわけではありませんでした。

今、あらためてこの問題を調べてみることで、わかってきたことがあります。

世界的に見ると、貧しい国においては、食べるものさえないという「絶対的貧困」に直面している子どもが多いこと。

日本においては、社会的弱者の家庭などで「普通の暮らし」がままならないという「相対的貧困」の子どもが多いこと。服が買えない、お腹いっぱい食べられるのは学校給食だけ、といった子どもが、7人に1人の割合でいること。

貧困の中で育った子どもが大人になり、親となっても、その状態から抜け出すことができず「貧困の社会的連鎖」が次世代に続いてしまうこと。

知れば知るほど、とても深刻な状況に置かれている子どもたちが多くいることに驚かされます。

「これは何とかしないといけない、キチンとこの問題に向き合う必要があるのでは」と考える一方で、もうひとつの思いがムクッと頭をもたげてきます。

「社会の大きな問題は、私が頑張ったって、何も変わらないのでは」という思いも湧き上がってくるのです。

このふたつの思いを抱え、揺れ動いているのが、偽らざる私のありようなのです。

そんな中で、とても心温まるニュースにであいました。「ゲンコツおじさんのタコ焼き」というお話です。

滋賀県のある街に、毎週1回、クルマの中でタコ焼きを焼くおじさんが現れます。親しみを込めて「ゲンコツおじさん」と呼ばれています。

タコ焼きを買えるのは「子ども」のみ。小学生だと、7～8個入りで、なんと10円！！

代金の支払い方法が独特なんです。握りしめた 10 円をゲンコツ箱に入れて支払います。箱の底にはタオルが敷いてあるので、本当にお金を入れたかどうか、わざとわからないように工夫してあるのです。

ゲンコツおじさんはこう仰います。

「おじさんが小さいころ苦労した経験があるから、お金がない子どもでもお腹いっぱい食べて笑顔になってもらいたい」

3年前から続いているこのタコ焼き屋さんには、今では地元の方から食材の寄付をいただくようになり、その活動に込められた思いは地域全体に広がりを見せています。

「どんなに私が頑張ったって、何も変わらないのでは」と思っていた私が、とても恥ずかしく感じられました。

歌手のさだまさしさんは、積極的にチャリティー活動を行っておられます。5年前には自身で「風に立つライオン基金」を設立されました。

最近、民放のチャリティー番組で「売名行為、偽善行為とか言われて、つらくないですか？」と聞かれた時のコメントです。

「痛くもかゆくもないよ。『売名行為』って言うけど、俺結構もう売れてるし、名前。『偽善行為』って言われても、もともと偽善者だから。そうだよ。言うだけ言って何もしないやつよりは、偽善者でも人のためにやるやつの方がいいじゃん」

偽善って、他者を見下す言葉ではなくて、自分のありのままを見つめた言葉なんだよ。そう教えてもらったように思います。

日頃からご法座でお聴聞しておられる方であれば、お念仏のみ教えについて、こうお聞かせいただいているのではないのでしょうか。

「阿弥陀さまがご覧になったこの私の姿とは、むさぼり・いかり・ぐちを抱えた煩惱具足の凡夫なのですよ。その私が、煩惱を抱えたまま、阿弥陀さまの願いをよりどころとして、お救いにあずかっていくことができるのです」

お念仏申す生き方とは、私自身のありようを「煩惱から離れられない凡夫であった」と知らされることです。自分の中に「本当の善」をもちえない姿が明らかになることです。

でも、それは「どうせ凡夫だから仕方ない」と、自分の煩惱性を正当化することなのではないでしょうか。

お念仏申す中で、自分の至らなさ、自己中心性に気付かされるまま、少しずつ、少しずつ、むさぼり・いかり・ぐちを離れて、阿弥陀さまのお慈悲をよるこぶ生き方へと転じられていく。そうお聞かせいただくことが大切な

では、と味わうのです。

あらためて私は、さまざまな環境・格差・貧困などの社会問題に、どう向き合っていくのでしょうか。

「どうせ解決しないし、何も変わらないよ」という向き合い方もあるでしょう。そうではなく「本当の善をもちえない私」であればこそ、「たとえ偽善であっても、一歩を踏み出したい」という向き合い方もあると思うのです。

お念仏申す生き方とは、私にとってどういう生き方なのか、を問いながら、私の課題として話し合ってみませんか。

問い9 環境・格差・貧困などの社会問題は、宗教が入り込む問題ではないと思いますが。

連研中央講師・福岡教区
中川 一晃

『連研ノートE〔改訂版〕』の問い9は「環境・格差・貧困などの社会問題は、宗教が入り込む問題ではないと思いますが」というテーマです。

このテーマに対して、

- ① このテーマの背景には何があるのか
- ② 浄土を指針としていくときに社会の問題が私の問題となっていく
- ③ 具体的な社会問題を学ぶ姿勢

以上の3つを考えていきます。

① このテーマの背景には何があるのか

社会問題は宗教が入り込む問題ではないと思う、という声は、今まで宗教者が積極的に社会の問題を問題としてこなかった、あるいは声をあげてこなかった結果であると言っていると思います。私たちの教団において、過去の歴史を振り返ると、死後、浄土に生まれ仏となることを救いとし、生きている今は阿弥陀仏への報恩感謝の日々を過ごしていくこと。あるいは、社会の秩序を乱さないことを生き方として説いてきました。その結果、部落差別を始めとするさまざまな差別に対しても、戦争に対しても反対することなく、場合によっては積極的に加担してきました。教えに背き、いのちに差をつけ、傷つけ合うことに加担してきたことへの反省、そして宗教が社会の問題に入り込むものではないという価値観を世間へ認識させてしまったことへも反省し、取り組むテーマが問い9です。

② 浄土を指針としていくときに社会の問題が私の問題となっていく

宗教とは、私の「宗」となる「教」えです。宗とは中心という意味があります。つまり、宗教とは私の(人生の)中心となる教え、もっと具体的に言えば、私が生きていくうえでの指針となっていくものです。

では、浄土真宗は何を私の指針として生きていく教えなのか。それは宗名の通りで浄土の真を宗としていく教えです。

浄土については『連研ノートE〔改訂版〕』でも問い5のテーマになっています。先ほども述べましたが、今まで浄土といえば、いのち終えた時に往生させてもらう世界、懐かしい方とまた会える世界など、死後の救いのみで語られることが主でした。しかし『連研ノートEスタッフノート』の中では「よるべない私のよりどころ」

「北極星が限りなく遠くにあつて、私の位置を知らせるように、浄土は常に私を照らし、迷いの姿を教えてください」

と、死後のための浄土ではなく、今を生きる私の姿を明らかにしてくださる世界として浄土を語っています。浄土を私の宗としたときに私は今まで何を頼りに生きてきたのだろうか？と自己を省みる人生となります。そして、これからどう生きていくのか、という新たな歩みになり、私の人生の視野を広げていきます。また、私の生き方が問われるということは同時に、私の生きている社会も問うていくということに他なりません。親鸞聖人のご消息で

「としごろ念仏して往生ねがふしるしには、もとあしかりしわがころをもおもひかへして、とも同朋にもねんごろにころのおはしましあはばこそ、世をいとふしるしにても候はめとこそおぼえ候へ。よくよく御ころえ候ふべし。」（『註釈版聖典』p742）

とお示しくださっています。浄土を願いとするものの「しるし」として、今まで悪を悪と知ることのなかった自分自身の生き方を反省し、それは世(社会)を厭うことでもあるのだと仰られています。

③ 具体的な社会問題を学ぶ姿勢

一口に社会問題といってもさまざまな問題があります。『連研ノートE』のサブテーマでも、脳死、臓器移植、原発と具体的にあがっていました。これらのサブテーマに対して「専門家ではないので、このようなサブテーマだと困る」との意見を聞きましたが、まずは問題の根底にある、いのちの序列化や軽視、それによって苦しんでいる人がいること、私の無関心が苦しんでいる方をより苦しませることをともに考えていくことが大切です。そして「専門家じゃないので困る」で終わらせることなく、その問題に対して、常にアンテナを張り、学ぶ姿勢をもつことも大切です。

このたび以上の3つを提起させていただきました。社会のことを問うことは私の生き方を問うことでもありますので、お互いがもやもやする法座になります。しかし、自己を問うていくからこそ大切な生き方が見えてきます。